第 2 回次世代シンポジウム 2013 年 10 月 14 日（月）秋田大学

術数文献をめぐるテキスト問題―天文五行占書を中心に―

佐々木聡（東北大学 専門研究員）

はじめに―天文五行占と抄本テキスト―

術数文献とは、天文・占卜・暦・風水・数学・医学等を包括した「術数学」に関する諸文献を総称したもので、従来から多角的な研究が行われてきたが、近年では、出土資料や敦煌文献などに見られる類似資料との比較研究からも関心が高まっている。その中で、報告者が近年、特に着目しているのが、天変地異や怪異現象などに基づき国家や個人の吉凶を占う「天文五行占書」である。漢代以降、社会通念化された「祥瑞災異思想」を背景に持つ天文五行占書は、総合的・体系的な内容を持つ勅撰・官撰占書から、在野の術数家の私撰占書、さらには民間宗教者などによる通俗的占書などといった多様なテキストが伝存する。その多くが抄本として写し継がれて来たものであり、従来はあまり目にすることのなかったテキストであるが、近年、『続修四庫全書』や『四庫未收書輯刊』、あるいは『四庫禁毀書叢刊』や『科学技術典籍通彙』、『四庫未収術数類古籍大全』などの影印本の出版、或いはウェブでの画像公開などにより、多くの伝本が容易に閲覧できるようになっている。

しかし、そのために却って表出してきた問題も少なくない。元より、抄本を中心に継承されてきた天文五行占書には、一般の典籍とは異なる、固有のテキスト問題も存在する。それはまた天文五行占書のみならず、術数文献全般とも共通する課題とも言える。

本報告では、この天文五行占書に関する報告者の調査・研究活動を例に、そこから見えて来た様々なテキスト問題を紹介し、その上で、これらの資料群が持つ問題点やそれに纏わる具体的な対応などについて発表し、本シンポジウムの話題提供とさせて頂きたい。

1、伝世文献としての天文五行占書とその伝本の概況

宋代から本格的に木版出版が盛んとなった一方で、天文五行占書の多くは、殆どが抄本の形式で受け継がれてきた。その第一の要因は、本書が国家により私習を禁じられた「天文・図讖の学」に当たるためであろう。その民間流布の実態は、敦煌占書の発見などにより再検討の余地も出て来ているが、それでもやはり天文・図讖に関する書籍の多くは、表だっては出版しにくい状況であったと考えられる。

したがって、歴代王朝を通じて重視され、校訂・出版を経て来た多くの典籍とは異なり、天文五行占書の多くは、私的な抄写や秘蔵などにより、抄本のみが受け継がれてきたのであった。そのため、後世の偽撰をはじめ、増補・加筆・節略・改変など様々な手が加わっており、結果として、一つの天文五行占書について、巻数や構成、内容に至るまで様々なテキストに枝分かれしてしまった。中には同じ書名で全く内容の異なる伝本も存在する（ex

『禮緯含文嘉』、『乾坤宝典』)。これは在野の私撰書のみならず勅撰・官撰系統の占書にも共通する問題である。一方で、この点が十分に認識されないままに、如上の影印本などが重宝され、一種の「定本」として扱われる傾向もある。しかし、あくまで多くのヴァリエーションを持つテキストの一つに過ぎないという認識が必要である。

以下に、報告者の調査に基づき、特に勅撰・官撰系の天文五行占書を中心に具体例を挙げてみたい。

２、唐『開元占経』

『開元占経』は唐・玄宗の勅命を受けて編集された奉勅撰天文五行占書である。奉勅撰の天文五行占書は、『開元占経』に先立って、北周時代に『霊台秘苑』120 巻が編集されたが、本書はその後、北宋で再編集された 15 巻本が伝存するのみである。そのため『開元占経』は数ある奉勅撰系天文五行占書の中で、最も代表的な一書と言え、従来から天文占及び天文学に関する資料との対比に用いられてきた。しかし、本書はテキストの伝来・流布に関して不明の点が多かった。『開元占経』は、目録上では宋代までに大部分が散佚していたものとされており、萬暦年間に発見された民間抄本のみが唯一の伝本とされていた。

しかし、近年、歴代王朝により本書が秘蔵されていたと見られる資料が出てきている。実際、本書の伝本には、巻 91、もしくは巻 91～97 が通行本とは全く異なる伝本が存在する。従来この二つのテキストは民間に流布した異本とされてきたが、近年の報告者の調査により、特に後者のテキストが明代の「閣本」（国家秘蔵本）の流れを汲むことが明らかとなってきた。系統を異にするテキストが存在する以上、従来、定本として用いられてきた通行本との対校・校訂が今後不可欠となってくると思われる。

また、それでは従来の通行本の巻 91～97 は、何に基づくのかと言えば、他の天文五行占書により補筆した可能性が指摘できる。天文五行占書は、歴代王朝によりそれぞれ編纂されたが、その中には前代の天文五行占書をそのまま孫引きした例が濃厚に見出せる（黄復山「『開元占経』版本流傳考」『叩問經典』、台湾学生書局、二〇〇五年）。そのため、時に古い天文五行占書を復元する際に、後代の占書が用いられた可能性も想定しておく必要がある。そのように見てくると、特に巻 91 などは、『乾象新書』『観象玩占』など、後世の天文五行占書に明確な類似記事を見出せる。

また、こうした天文五行占書同士の複雑な転載関係を前提としたとき、その種本としてのルーツとなるのが『開元占経』である。したがって、本書は各時代の天文学・占学の在り方を考える出発点としても改めて評価する必要がある。

３、金～明初?『天元玉暦祥異賦』

『天元玉暦祥異賦』は祥瑞災異をうたった天文五行賦に、約 870 枚に及ぶ天文気象占図を配した上図下文の天文五行占書であり、術数学、特に天文学における重要資料である。また、明・仁宗が天文学の教科書として楊士奇ら臣下に下賜したことでも知られる。本書

は彩色の天文気象図を持つテキスト（彩色抄本）が注目され、それ以外にも伝存する無図有注本や無図無注本は殆ど着目されてこなかったが、50 部近く残る伝本の内、30 部程度を調査し、検討したところ、彩色抄本の成立は 3 種類の伝本中最も遅いことが分かった（明・仁宗期前後か、それ以降）そして、却って無図有注本の方が成立は古く、金代まで遡り得ることも分かってきた。しかも、その注には、当時の天文学者が用いた諸書が引かれていることから見ても、研究資料としての無図有注本の価値は高く再評価できると考えられる。

本書の問題は、その伝本のヴァリエーションの豊富さにある。上述の通り、大まかには形式に拠って、3 系統に分けられるが、実際には、抄出本や増補本、また書名の異なる本なども少なくない。巻数も、統一性が無く、不分巻、4 巻本、7 巻本、19 巻本、20 巻本など様々である。よって、目録では判断することが出来ない場合が多い。

また、極端な例としては、次のような伝本も見つかっている。彩色抄本の上図下文形式は、実は北宋の『宝元天人祥異書』をモデルとしているが、その『宝元天人祥異書』の伝本の中には、却って『天元玉暦祥異賦』を手本として、同書より多くの条文を『宝元天人祥異書』に加筆した例があった。書名も『宝元御製天人玉暦祥異図説』などとなっており、果たしてこれを『宝元天人祥異書』とすべきか、『天元玉暦祥異賦』とすべきか、判断の困るところであった。これは後世に作られた本が著名となったことで、却って前代まで改変の影響を受けた例と言えよう。尤も、こうした伝本群は、調査・整理を進める上では、非常に困難が伴うものの、逆にこうした痕跡がはっきりと窺えることで、本書のユニークな資料価値も見えて来たとも言える。

４、まとめと問題提起

以上、二つの勅撰・官撰系天文五行占書を例として、その伝本の特徴を挙げながら、テキスト上の問題点を指摘してみた。それぞれに問題は異なるが、先ず両者に共通するのは、従来的な目録学的アプローチにより、伝来状況や現在の伝本状況を必ずしも明らかに出来ない点である。勿論、研究の起点としては歴代もしくは近代の目録の調査が必要不可欠となるが、そこからいかに伝本を広く調査してゆくかが課題となる。その中で書名や巻数など目録上のデータ以上に、豊富なヴァリエーションを持つ『天元玉暦祥異賦』のような事例もまた多く出てくるのではないかと考えている。なお、こうした伝本の豊富なヴァリエーションは、一つの定本としてのテキストを求めるというよりも、むしろ伝来や後世的受容の在り方を示すケーススタディとして研究する視点も必要かと思う。

ただし、その際に問題となるのが、資料の整理状況や閲覧環境であろう。一般的に言われているように、こうした未整理の文献は可能な限り実物の実地調査を行うべきであるが、それを補助する影印本やウェブでの画像公開は可能な限り多く、かつ伝本の系統やヴァリエーションに対して網羅的にあることが望ましい。また図書館での複写や撮影も初期の調査・伝本整理段階では部分的にならざるを得ないが、最終的に全体的な考察を進める段では、少なくとも主要伝本全体の複製が必要となる。目下のところ、全文複写は許可されな

い機関も少なくないが、一方で積極的に公開やデジタル画像化を進めている機関も増えてきている。調査成果を公開し、積極的に伝本の資料価値を訴えてゆくことで、所蔵機関や出版社の理解・協力に繋げていく必要もあろう。無論、既に多くの分野でこうした働きかけが行われていると承知しているが、天文五行占書の分野でもこうした働きかけの必要性が高まってくるかと思われる。特に、近年の大陸で刊行される術数文献関係の叢書では、闇雲に底本が選択される傾向が少なくないように思われる。テーマに沿った総合的な出版企画のためには、致し方ない面もあるかと思うが、同一系統の資料が重複して出版される一方で、より重要・貴重な伝本が見過ごされているのも事実である。今後、調査・研究の成果を出版事業にフィードバックする取り組みがより強く求められていると言える。